

曲目解説

交響詩「ぐるりよざ」より 第3楽章「祭り」

Symphonic Poem for Band "Gloriosa" .Dies Festus

伊藤康英

Yashide Ito (b.1960 : 日本)

伊藤康英は作曲・編曲活動のほか、ピアノや著述など幅広い活動を展開している。吹奏楽曲も数多く手掛けており、その代表作とも言えるのが交響詩「ぐるりよざ」である。この作品は鎖国時代の長崎地方で、キリスト教の禁教令後にも、カトリック典礼音楽の歌詞やメロディが密かに歌い継がれ、次第に日本風に変化していったことに注目して作曲された。タイトルの「ぐるりよざ」とは、長崎地方で歌われていたグレゴリオ聖歌の1つ「グロリオザ」(Gloriosa)が訛ったものである。海上自衛隊佐世保音楽隊の委嘱により1990年作曲、「祈り」、「唄」、「祭り」の全3楽章から成り、全曲演奏20分という大作。海外でも高く評価され、広く演奏されている。

今回は第3楽章「祭り」を演奏する。この曲は「長崎ぶらぶら節」のメロディに基づいてはいるが、グレゴリオ聖歌の要素も盛り込まれており、西洋音楽と日本古来の音楽が融合したような、不思議な魅力を持っている。終楽章らしい、壮大なクライマックスへと突き進んでいく。

交響曲第1番「指輪物語」より

Symphony No.1 " The Lord of the Rings"

ヨハン・デメイ

Johan de Meij (b.1953 : オランダ)

デメイは作曲・編曲活動のほか、楽譜出版社の経営も行っている。吹奏楽、金管バンドなどの優れた作品を数多く手掛けており、日本でも高い人気を有する。2つの交響曲を書いているが、この交響曲第1番「指輪物語」は、トルキーン(1892-1973:イギリス)の長編小説を題材として、5年の歳月をかけて作曲され、1988年に初演が行われた、全5楽章、演奏時間40分におよぶ超大作である。この原作小説は映画化されて現在公開中であるが、その映画音楽とは直接関係はない。原作の内容を簡単に言えば「とてつもない魔力を秘めた指輪」を巡る物語で、交響曲の5つの楽章は、物語に登場する人物や、場面に基づいている。このような物語性の高い吹奏楽作品は、これ以前には例がなく、演奏時間も非常に長いことから、どの出版社も「こんな長い作品は売れない」と、取り合わなかったという。結局、作曲者自身が出版社を設立して、ようやく出版に至ったが、出版されるや爆発的なヒットとなり、現在でも高い人気を有する作品である。

今回演奏するのは、2001年出版のP.ラベンダー編曲版で、第1楽章「魔法使いガンダルフ」、第5楽章「ホビットたち」を中心に、原曲を約9分にまとめた作品である。なお、今回は特別に、ラベンダー編曲版でカットされてしまった原曲のエンディングを21小節追加して演奏する。

オクトーバー

October

エリック・ウィテカー

Eric Whitacre (b.1970 : アメリカ)

ウィテカーはハリウッドで活躍する若手作曲家である。多彩なジャンルの作品を手掛けているため、吹奏楽曲は決して多くはないが、90年代に発表された2つの大作「ゴーストトレイン」、「ラスヴェガスを喰い尽くすゴジラ」がヒットして、ウィテカーの名前は吹奏楽界で一躍有名になった。そろそろ新作が期待された2000年に発表されたのが、この「オクトーバー」である。それまでのウィテカーの作品は、いずれも難度が高く複雑なため、なかなか手が出なかったが、この作品は中学校合同バンドの委嘱作品であるため、それまでの作風とは一転して、流れるような美しいメロディを持ち、大変感動的な理解しやすい作品となった。オクトーバーとは文字通り「10月」のこと。ちょっと季節外れの感もあるが、秋の雰囲気伝わってくるだろうか？

大地と水と火と空の歌

Songs of Earth, Water, Fire and Sky

ロバート・スミス

Robert W. Smith (b.1958 ; アメリカ)

R.W. スミスは、母校のトロイ州立大学のバンド・ディレクターを務めながら、多くの吹奏楽作品を手掛けている。比較的簡単な技法で書かれながらも「格好良く」聴こえるものが多く、高い人気を有する。この作品は、1975年に音楽学者ヘスが、アメリカ先住民族の居住地を旅しながら収集・記録した、そこに伝わる踊りや歌の中から、スミスが4つの音楽を選び、旋律やリズムに手を加えて1988年に出版された。力強い序奏部に続いて現れる4つの音楽は次の通り。

「バタフライ・ダンス」 Butterfly Dance

木管楽器の細かい装飾的な動きで始まる。蝶はとらえにくく、災難から逃れる象徴とされる。ヒラヒラと蝶の舞う姿を想像しながら聴いて欲しい。

「ガー・ソング」 Gar Song

2本のフルートの静かな旋律を挟み、打楽器群のリズムから始まる。「ガー」とは、アメリカに広く生息している、細長い口を持った魚(ダツの仲間)。木管楽器の細波のような響きを背景にホルンの開放的な旋律が奏でられる。やがてホルン、フルートによる美しい和音へと発展する

「ストンプ・ダンス」 Stomp Dance

ユーフォニアムの緩やかなソロから始まる。これは火を囲んで足踏みをしながら踊る曲で、次第に加速していき、熱狂的な音楽へと転じる。奏者の足踏みも効果音として加えられている。

「アリゲーター・ダンス」 Alligator Dance

打楽器群のリズムを挟み、奏者の歌声を伴った力強い曲となる。曲はクライマックスへと突き進み、最後は序奏部の再現を経て、終幕を迎える。

火の伝説

Ritual Fire (A Legend of Fire Festival in Kyoto)

櫛田肤之扶

Tetsunosuke Kushida (b.1935 ; 日本)

櫛田肤之扶は京都の邦楽の家に生まれ育ち、その作品は、伝統的な邦楽を基調とした日本的・民族主義的な作風が特徴である。この作品は京都に伝わる祭事・神事等に基づき、1980年に作曲された。作曲家はこの曲について「作曲に際して」として次のように述べている。

大晦日から元旦にかけて、祇園八坂神社。着飾った若い女性の手に火縄がくるくる回されて、荘厳な除夜の鐘の音が東山一帯に響き京は新年を迎える。このおけら火で元旦の雑煮を炊き、一年の無病息災を祈る。八月十五日夜、祖先の精霊を迎えたお盆は、この大文字五山の送り火で精霊を送り終える。祇園祭りから続いた京の夏は終わり、秋を迎える。秋十月時代祭の夜、鞍馬街道に「サレヤレ、サイリョウ」掛け声と篝火の列が続く、太鼓の音とともに夜九時クライマックスを迎え、京の秋に終止符を打つかのように炎は天を焦がす。

京都に伝わる火の祭事・神事・伝統行事の思いから、人間の情熱・祈り・自然に対する畏敬の念を表現しようとした曲です。スケールの大きいメロディ・ラインと勇壮な民族的リズムで、心の奥深くから燃え上がる感情を表現しています。

この主題を『火の伝説』と名付けることにより、人間の生命の自然への回帰していく姿を追ってみました。それは自分自身の生命の自然への回帰ともとれます。そこにはまた祖先から受け継いだ生命の、湧き上がるような情熱を感じます。(櫛田肤之扶)

前半の神秘的な旋律と、後半のダイナミックな音楽が魅力的。最後はフルートが美しく歌い、作曲者はこの部分を「大文字五山の送り火が静かに消えていくように」と述べている。大変に感動的な作品である。この演奏会の最後を飾るにふさわしい作品と言えるだろう。